

Title	高貴な「痴れ者」たち：『世説新語』に見る痴人群像
Sub Title	Noble fools in Shishuoxinyu
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.39 (2007. ), p.105- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0105">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0105</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 高貴な「痴れ者」たち

——『世説新語』に見る痴人群像——

八 木 章 好

## はじめに

魏晉は、中国の精神文化史において極めて特異な時代である。南朝宋・劉義慶の『世説新語』は、この時代の文化現象をパッチワークの如き逸話の寄せ集めによって、頗るランダムでありながらも生き生きと鮮やかに再現している。

本紀要の前号（第38号）では、『世説新語』を主な材料として、「狂」に焦点を当てて魏晉の文人精神の一側面を考察した。<sup>1)</sup> 本稿は、引き続き『世説新語』を中心として、『晋書』などの史書から資料を補いつつ、新たに「痴」という概念に焦点を当てながら魏晉の貴族サロンに集った名士たちの文人精神について再度検証を試みるものである。

「狂」と「痴」は、いずれも元来はマイナスの字義を持ちながら、思想や文学の領域においては、必ずしも否定的に解釈される概念ではなく、むしろ故意に正道から逸脱したり世俗から離反したりしようとする文人精神が寄託されたプラスの概念として現れることが少なくない。

こうした思想性を伴った肯定的な用いられ方は、時代的には「痴」の方が「狂」に比べて大分後れる。「狂」は、春秋時代、すでに孔子によって進取の気として肯定的に取り上げられている。これに対して、「痴」は、古くは専ら原義、すなわち病的に異常であったり知能的に劣っていたりする意味でのみ用いられており、魏晉に至って、はじめて特殊な文化的含意を以て語られるようになる。そして、『世説新語』において端的に見られるように、「痴」は「狂」と並んで、この時代の典型的な人物評の一つを形成するようになるのである。

「狂」が動的で外向きであるのに対して、「痴」は静的で内向きであるというように、両

者は顕著な対照的性格を持ちながらも、文人精神を担う概念として通底する部分を共有している。魏晋以後、明清に至るまで、「狂」と「痴」は、時には対峙的に、また時には補完的に呈示されながら、反俗的・超俗的な文人たちが思想的主張や文学的創作を行う際に好んで言及する概念として、中国の精神文化史にその系譜を保ち続けているのである。<sup>2)</sup>

## 一 「痴」の字義

### (一) 不慧

「痴」は、後漢・許慎『説文解字』に「不慧也」(慧ならざるなり)とあるように、原義は、<sup>さとし</sup>慧くない、<sup>さとし</sup>賢くないという意味で、精神(心の働き)が足りないこと、あるいは鈍いことをいう。つまり、平たく言えば、「馬鹿」、「愚か」であることを指す。「痴愚」、「痴鈍」、「痴騃」などという場合がそうである。南唐・徐鍇『説文解字繫伝』には、

痴者は<sup>しんし</sup>神思足らず、故に亦病なり。<sup>3)</sup>

とある。「痴」とは「神思」(精神・思惟)の働きが足りないことであり、疾病の一種であるとしている。

清・段玉裁『説文解字注』には、

心部に曰く、慧者は<sup>けん</sup>猥なりと。犬部に曰く、猥者は急なりと。痴者は遲鈍の意、故に慧と正に相反す。此れ疾病に非ざるも、而して亦疾病の類なり。<sup>4)</sup>

とある。「慧」が心の動きが「急」(敏捷・活発)であることをいうのに対して、「痴」は「遲鈍」であることをいう。ゆえに、いわゆる疾病とは言わずとも、それに類するものであるとしている。また、清・王筠『説文句読』には、

痴は心の疾為り、<sup>りょう</sup>療して<sup>い</sup>瘳ゆるべからず。<sup>5)</sup>

とあり、「痴」は心の疾病であって、治療して癒えるものではないとしている。

「痴」の旧字(本字)は「癡」に作る。「疑」は、止まって進まないこと、迷い惑うことをいう。それが「癡」に示されるように一種の病態と見なされている状態を表す。つまり、

事理に迷い、思考が停滞する心の状態を表す文字である。白川静『字通』には、

疑は人が後ろを顧みてたち迷う意で、神思足らず、疑惑猶予して決しがたいことをいう。その病的な状態にあるものを癡という。

とある。「痴」に作るのは、「知」を音符とした俗字である。<sup>6)</sup>

「疒」の文字である以上、元来は病気の範疇に入るものとして見なされていたことは確かであり、明・張自烈『正字通』に、

痴は、方言に顛狂病を借称す。<sup>7)</sup>

とあるように、病理的な意味での疾患（顛狂や瘋癲の類）として用いることもあるが、しかし総じて言えば、一般的ないわゆる疾病とは区別して扱われることが多い。

## (二) 耽溺

また、「痴」には派生義として、何か一つのことに心を奪われ、それにのめりこみ耽溺するという意味がある。「花痴」、「書痴」などというように、一つの物や事柄に耽溺するものは「癖」というに等しく、また情愛（主に男女の情）に耽溺するものは「情痴」と呼ばれる。特定のことに極端な執着を示し、周囲の目には正に「馬鹿」、「愚か」に映ることを指す。「凝」と意味的に通じるところがあり、頭の動きが一つのことに集中し凝固する状態を示す。

古い字書には、この意義は記されていない。比較的新しいものの中では、『辞源』に「愛好至入迷」、『形音義綜合大字典』に「專意一事，類似獸者曰癡」、『現代漢語詞典』に「極度迷戀某種事物；由於某種事物的影響變傻了」などがある。

## (三) 煩惱

「痴」はまた、仏教における三毒「貪・顛・痴」の一つとされる。『大藏法数』十一に、

迷惑の心、之を名づけて痴と為す。若し一切の事理の法に於いて、明了する所無く、顛倒妄取すれば、諸邪行起こる。是を痴毒と名づく。<sup>8)</sup>

とある。悟りを妨げる「迷惑」（煩惱）の一種である。

笑話の類で、愚行を犯す和尚をしばしば「痴」と称するのは、この文字が仏教用語として用いられることと関わりがあろう。

## 二 魏晋以前の「痴」の用例

『春秋左氏伝』成公十八年に、

周子に兄有れども慧無く、菽麦しゆくばくを弁ずること能わず、故に立つべからず。<sup>9)</sup>

とある。孫周の兄は愚かで豆と麦を見分けることすらできなかつたので、君主に立てることができなかつたという。晋・杜預の注に、

不慧は、蓋し世の所謂白痴なり。<sup>10)</sup>

とある。ここの「痴」は、低能、智恵遅れの意であり、知的能力が劣ることをいう。

『韓非子』「内儲説上」に、

嬰兒痴聾狂悖ちろうきょうはいの人、嘗て此に入る者有るか。<sup>11)</sup>

とあり、「痴」者を幼児、聾啞者、狂人と並べている。これらはいずれも知覚や判断力が十分に備わっていない者、あるいはそうした能力に劣る者を代表している。

また、『文子』「守法」に、

臣に任ずは危亡の道なり。賢を尚たつとぶは痴惑のつとの原なり。天に法のつとるは天地を治むるの道なり。<sup>12)</sup>

とある。「痴惑」は、事に当たって分別を欠くことをいう。

また、『越絶書』「計倪内経」に、

人は固より同じからず、恵種もとは聖を生み、痴種もとは狂を生む。<sup>13)</sup>

とある。「痴種」は、生来の素質が劣るものをいう。

以上の「痴」字は、いずれも愚昧・愚劣の意で用いている。

一方、『淮南子』『俶真訓』に、

夫れ人の天より受くる所の者は、耳目の声色に於けるや、口鼻の芳臭に於けるや、肌膚の寒燠に於けるや、其の情は一なり。或いは神明に通じ、或いは痴狂を免れざるは、何ぞや。其の制を為す所の者異なればなり。<sup>14)</sup>

とあり、『論衡』『率性』に、

痴狂の疾有るは、路に歌啼し、東西を暁らず、燥湿を睹ず、疾病を覚らず、飢飽を知らず、性已に毀傷すれば、如何ともすべからず。<sup>15)</sup>

とある。「痴狂」は、いずれも癡狂病の類を指し、精神的に異常をきたして気がふれたさまをいう。

このように、「痴」の文字は、能力的に劣ることをいう場合と、病理的に異常があることをいう場合とに大きく用例が分かれる。

さて、ここで特に注意を要するのは、「痴」字の使用頻度の推移についてである。上記のそれぞれの場合の類義語である「愚」や「狂」の文字が古くからごく一般的に用いられる常用字であるのに対して、「痴」はその使用頻度が遙かに少なく、用いられる状況も限られている。実際に統計的に調べてみると、先秦時代の主要な文献中にほとんど用例が見られない。<sup>16)</sup> 実に、『論語』、『孟子』、『老子』、『莊子』、『詩経』、『楚辞』など先秦の思想・文学を代表する書物の中には「痴」字の用例が一つもないのである。史書においても、『史記』にはやはり皆無であり、『漢書』にはわずか一個、『後漢書』に二個、『三国志』では「魏志」に二個の用例があり、「呉志」、「蜀志」にはまったくない。ところが、『晋書』に至ると二十五個もの「痴」字の用例が見つかり、『世説新語』においても合計十四箇所に用例を見ることができる。

この数字の推移は看過できない事実であり、「痴」字によって表される概念が魏晋の時代に至ってにわかに注目されるようになったことの十分な証左となりうる。そしてこの時代、「痴」字は単に数字上の量的な変化のみならず、生理的問題から文化的問題へと質的な転化を遂げるのである。<sup>17)</sup>

### 三 『世説新語』の痴人群像

『世説新語』には多くの「痴」字の用例を見ることができる。「痴」は、当時の貴族社会における人物評語としてしばしば用いられた言葉の一つであったことが推察されるが、この字に込められた含意は一様ではない。以下、「痴」と称された人々をタイプ別に分けて、各々の典型的な例を挙げながら、その精神文化的背景を検証してみたい。

#### (一) 愚昧の「痴」

「規箴」篇に、東方朔の機智を示す次のような話がある。

漢の武帝の乳母嘗て外に於いて事を犯す。帝憲の申べんと欲し、乳母救いを東方朔に求む。朔曰く、「此れ唇舌の争う所に非ず、爾必ず済われんことを望まば、將に去らんとする時、但だ当に屢々帝を顧みるべし、慎みて言うこと勿かれ。此れ或いは万一に冀うべきのみ」と。乳母既に至り、朔も亦側<sup>かたわら</sup>に侍し、因りて謂いて曰く、「汝は痴なるのみ。帝豈に復た汝が乳哺の時の恩を憶わんや」と。帝は才雄にして心忍なりと雖も、亦深く情恋有り、乃ち悽然として之を愍<sup>あわれ</sup>み、即ち救して罪を免ず。<sup>18)</sup>

「たわけ者！ 陛下のようなお方が、お前がお乳を差し上げた時の恩など覚えておられようか」——東方朔が武帝の乳母を罪から救おうとして演じたセリフである。武帝の同情を誘うため、わざと乳母を痴れ者呼ばわりしたのである。

ここでは、「痴」字は原義そのもので用いられている。愚昧・愚劣の意であり、それ以上のものはない。魏晋の頃に「痴」が特殊な精神文化的含意を以て用いられるのは、知識階級の男性に対して使われる場合のみであり、庶民階級の者や婦女に対する場合にはそのような含意はない。

また、「紕漏」篇に、息子が父親の愚行を人に言いふらしてしまう話が見える。

謝虎子嘗て屋に上りて鼠を熏<sup>くん</sup>ず。胡兒既に父の此の事を為すを知るに由無く、人の「痴人の此を作<sup>な</sup>す者有り」と道<sup>みち</sup>うを聞き、之を戯笑す。時に此を道<sup>みち</sup>うこと復た一過に非ず。太傅既に己の之を知らざりしを了<sup>きと</sup>り、其の言次に因りて、胡兒に語<sup>つ</sup>げて曰く、「世人此を以て中郎を誇<sup>ちゆうろう そし</sup>り、亦我も共に此を作<sup>な</sup>せりと言う」と。胡兒懊熱<sup>おうねつ</sup>し、一月日

## 高貴な「痴れ者」たち

齋を閉じて出でず。太傅虚託きょたくして己の過ちを引き、以て相開悟かいごするは、徳教と謂うべし。<sup>19)</sup>

謝虎子（謝朓）が屋根に上って鼠を燻いぶそうとした。「馬鹿な奴がこんな間拔けな真似をした」と人が言うのを聞いて、息子の胡兎（謝朗）はそれが自分の父のこととは知らずに周囲の者に吹聴してしまったという話である。

ここでの「痴」もほとんど原義のままである。この逸話の中心はむしろ後日談として伯父の謝太傅（謝安）が遠回りに胡兎を教え諭したところであり、謝朓の行為そのものには愚昧・愚劣な行為であるということ以上に特に含むものはない。

### (二) 未熟の「痴」

「方正」篇に、名門貴族の王述が息子の王坦之に持ちかけられた軍人一家との縁談に激怒する話がある。

王文度桓公の長史ちやうし為りし時、桓兎の為に王の女むすめを求め、王藍田おうらんでんに咨はからんことを許す。既に還るに、藍田文度を愛念し、長大なりと雖も猶お膝上に抱著す。文度因りて言う、「桓己が女の婚を求む」と。藍田大いに怒り、文度を排して膝より下して曰く、「悪くんぞ見ん文度の已に復た痴いにして、桓温かんおんの面つらを畏るるを。兵なり、那ぞ女を嫁して之に与うべけんや」と。<sup>20)</sup>

桓公（桓温）が自分の息子の嫁に王文度（王坦之）の娘を望んだ。王坦之が父の王藍田（王述）に相談すると、「軍人などに嫁にやれるか！」と一蹴されたという話である。王述はすでに成人している王坦之を膝の上に抱いて可愛がっていたが、腹を立てた王述はこれを払いのけ、「痴」と呼んで叱責している。

ここでの「痴」は、分別のない愚か者という意味で原義に近いが、知的能力に劣る愚昧の意ではなく、世間知らずで物の道理をわきまえないという幼稚・未熟の意を表す。

### (三) 奇態の「痴」

東晋の画家顧愷之は、その卓越した画才・文才に加えて、また数々の愚行・奇行で知られる。「文学」篇に見える逸話に付した劉孝標注は、『中興書』を引いて、



愷<sup>がいし</sup>之は博学にして才氣有るも、人と為りは遲鈍<sup>ちどん</sup>にして自ら矜<sup>きんしょう</sup>尚し、時の笑う所と為る。<sup>21)</sup>

とあり、「遅鈍」な上に驕り高ぶったさまが人々の失笑を買っていたことを伝える。さらに劉注は、宋の明帝の『文章志』を引いて、

桓温<sup>かんおん</sup>云う、「顧長康<sup>こちやうこう</sup>の体中、痴<sup>かっ</sup>と黠<sup>かつ</sup>と各々半ばす。合して之を論ずれば、正<sup>へい</sup>に平平たるのみ」と。世に云う、三絶有り、画絶<sup>がぜつ</sup>・文絶<sup>ぶんぜつ</sup>・痴絶<sup>ちぜつ</sup>、と。<sup>22)</sup>

とあり、この一節が広く世間に語り継がれ、後世顧愷之には「痴」というイメージが定着するようになる。

顧愷之の愚行・奇行は、例えば『晋書』の伝に、

桓玄<sup>かんげん</sup>嘗て一柳葉を以て之を給<sup>あぎむ</sup>きて曰く、「此れ蟬<sup>せみ</sup>の翳<sup>かく</sup>る所の葉なり、取りて以て自ら蔽<sup>おほ</sup>えば、人己を見ず」と。愷之喜び、葉を引きて自ら蔽うに、玄就きて焉<sup>これ</sup>に溺<sup>ゆぼり</sup>す。愷之其の己を見ざるを信じ、甚だ以て之を珍しとす。<sup>23)</sup>

とある。身を隠す魔法の葉のことを信じ込んで、桓玄に小便をかけられてしまうという滑稽談であるが、このように顧愷之の逸話は、人に騙されたりコケにされたりという類の話ばかりである。いずれも世故に疎い間の抜けた芸術家の姿を彷彿とさせるものであり、阮籍や劉伶のような反抗的で奔放不羈な狂態とは質を異にする。

#### (四) 有情の「痴」

「紕漏」篇には、幼少の頃は聡明を称えられていた任瞻が江南に渡ってから様子がおかしくなったという逸話がある。

童少の時、神明愛すべく、時人<sup>いくちやう</sup>育長は影も亦好しと謂う。江を過<sup>よ</sup>りし自<sup>よ</sup>り、便ち志を失う。王丞相先に度<sup>わた</sup>りし時賢<sup>しやう</sup>を請<sup>せきとう</sup>じ共に石頭に至りて之を迎え、猶<sup>ちゆうじつ</sup>お疇日のごとく相待する<sup>な</sup>を作せしに、一見して便ち異有るを覚ゆ。席に坐し竟<sup>おわ</sup>り、飲を下せば、便ち人に問いて云う、「此れ茶<sup>ちや</sup>為るか、茗<sup>めい</sup>為るか」と。異色有るを覚え、乃ち自ら申明して云う、「向<sup>さき</sup>に飲<sup>のむ</sup>の熱<sup>ねつ</sup>為るか、冷<sup>ひや</sup>為るかを問いしのみ」と。嘗て行きて棺邸<sup>くわんてい</sup>の下<sup>よ</sup>徒

り度り、流涕悲哀す。王丞相之を聞いて曰く、「此れは是れ有情の痴なり」と。<sup>24)</sup>

「志を失う」とは、精神や知能に異常をきたして頭がぼんやりとしたさまをいう。王丞相（王導）らに出迎えられた際、お茶でもてなされた任育長（任瞻）は、茶と茗が同じものを指すことを知らずに、「これは茶か茗か」と質問をしてしまう。それをごまかそうとして、「熱いのか冷たいのかを聞いただけだ」と言い、茶にも酒と同様に熱いのと冷たいのことがあると思いついでいることを露呈してしまうという二重の失態を伝える話である。

このあとに、棺桶屋の前を通りかかって涙を流して悲しんだ任瞻のことを王導が「有情の痴」（情にもろい痴れ者）と呼んだというごく短い別の逸話が付け加えられている。この一節は、「痴」と「情」とが結びついて現れる最も古い文献として、『牡丹亭還魂記』や『紅樓夢』など後世の「情」を主題とした戯曲・小説を論じる際にしばしば言及されている。

#### （五）隠徳の「痴」

「賞誉」篇には、王済が痴れ者呼ばわりされている叔父王湛の隠れた才能に気づいて推奨するという故事がある。

王汝南おうじょなん既にしよせい所生の服を除き、遂に墓所さひに停まる。兄の子済来りて墓を拜する毎ごとに、略叔に過らず、叔も亦候またず。済脱し時に過るも、寒温に止まるのみ。後聊か試みに近事を問えば、答对甚だ音辞有りて、済の意外に出ず。済極めてえんがく惋愕し、仍りて与ともに語り、うた転た精微いたに造る。済先には略子してつ姪の敬無かりしも、既に其の言を聞いて、りんぜん覺えずとも懐然として、心形俱に肅たり。遂に留まりて共に語り、日を弥り夜を累ぬ。済はそう儻爽なりと雖も、自ら視ること缺然たり。乃ちきぜん喟然として歎じて曰く、「家に名士有るに、三十年にして知らざりき」と。……既に還りて、渾済に問う、「何を以て暫く行きて日を累ねたる」と。済曰く、「始めて一叔を得たり」と。……武帝済を見る毎に、すなわ輒ち湛たんを以て之を調して曰く、「卿が家の痴叔死するや未だしや」と。済常に以て答うる無し。既にして叔を得、後に武帝又問うこと前の如し。済曰く、「臣が叔は痴ならず」と。其の實の美なるを称す。帝曰く、「誰にか比せん」と。済曰く、「さんとう山濤以下にして、きしよ魏舒以上なり」と。是に於いて名をあらわ顯す。年二十八にして、始めてかん宦す。<sup>25)</sup>

王済は叔父の王汝南（王湛）に甥としての敬意を払っていなかった。ある時共に語るうちに、王湛が学問にも技芸にも卓越した人物であることにはじめて気づいた。<sup>26)</sup> 王済は常々武帝（司馬炎）に「阿呆の叔父はまだ生きているかね」と王湛のことでからかわれて返答に窮していたが、叔父の真価を知った後、武帝からいつものように問われると、「わが叔父上は阿呆ではございませぬ」と答え、王湛が本当は頗る立派な人物であると褒め称えた

という話である。

劉注が引く鄧粲『晋紀』に、

隱徳あるも、人の之を知る莫し。兄弟宗族と雖も亦以て痴と為し、唯だ父 昶 のみ焉を異とす。<sup>27)</sup>

とあるように、一族の者みなが王湛の「隱徳」（隠れた人徳）に気づかず、彼を痴れ者扱いしていた。武帝が王済に向かって王湛のことを「痴叔」と呼んだのもこうした風評に基づくものである。

「痴」と呼ばれる人間の多くは、実際には決して「痴」ではなく、周囲の者がその才能や人徳に気づかないだけなのである。『晋書』の「王湛伝」も王湛の隱徳について記し、さらに「言語少なし」、「当世と交わらず、沖素簡淡たり」などとあるように、寡黙で木訥、素朴で淡泊な性格で、世間の人々と交際せず、その才を秘め隠していたことを伝えている。<sup>28)</sup>

王湛の「痴」については、「賢媛」篇にも、

王汝南少くして婚無く、自ら郝普の女を求む。司空其の痴にして、会ず婚処無からんことを以い、其の意に任せて、便ち之を許す。既に婚するに、果して令姿淑徳有り。東海を生み、遂に王氏の母儀と為る。或ひと汝南に問う、「何を以て之を知る」と。曰く、「嘗て井上に水を取るを見るに、挙動容止常を失わず、未だ嘗て忤観せず。此を以て之を知る」と。<sup>29)</sup>

とある。のちにその才を異として認めた王司空（王昶）も、初めは息子のことを痴れ者と見なしていた。王湛が家柄の低い郝氏の娘を欲しいと自ら申し出ると、王昶は「どうせ息子は痴れ者で縁組みなど無いだろう」と思い、好きなようにさせた。結婚してみると、果

たして淑徳を備えた美しい女性で、王氏一族の良き母の模範となったという話である。

この逸話は、痴れ者呼ばわりされていた王湛が、実は眼識の高い人物であることを物語っている。<sup>30)</sup>

## (六) 大韻の「痴」

大人物の素質のある人間は、しばしば痴れ者として世間の人々の目に映る。「任誕」篇に登場する羅友もそうした人間の一人である。

襄陽の羅友大韻有り、少き時多く之を痴なりと謂う。嘗て人の祠を伺いて、食を乞わんと欲するに、往くこと太だ蚤く、門未だ開かず。主人神を迎え出でて見、問うに時に非ずして、何ぞ此に在るを得たるを以てす。答えて曰く、「卿の祠を聞き、一頓の食を乞わんと欲するのみ」と。遂に門の側に隠れて、暁に至り、食を得て便ち退き、了に作ずる容無し。人と為り記功有り。桓宣武に従いて蜀を平らげ、蜀の城関観宇を按行し、内外の道陌の広狭、植種の果竹の多少、皆之を黙記す。後に宣武漂洲にて簡文と集い、友も亦預る。共に蜀中の事を道うに、亦遺忘する所有らば、友皆名列し、曾て錯漏無し。宣武験するに蜀の城関簿を以てするも、皆其の言の如し。坐する者歎服す。謝公云う、「羅友は詎ぞ魏陽元に減ぜん」と。後に広州刺史と為り、鎮に之くに当たり、刺史桓豁語げて莫に来宿せしめんとす。答えて曰く、「民已に前期有り。主人貧しく、或いは酒饌の費え有らん。見に与に甚だ旧有り。請う別日に命を奉ぜん」と。征西密かに人を遣わし之を察せしむ。日に至り、乃ち荊州門下書佐の家に往き、之に処りて怡然たること、勝達に異ならず。<sup>31)</sup>

羅友には「大韻」(大人物の風格)があったが、彼もまた若い頃は「痴」と呼ばれていた。この逸話では、羅友の人となりについて複数の特質が挙げられている。まず最初に強調されているのは、羅友の物事に対する拘りのなさである。祭祀の供え物をもらい受けるという乞食のような真似をしても、まったく恥じる様子がない。そうした行為を恥とする認識がもとより欠如しているのである。

次に語られているのは、彼の抜群の「記功」(記憶力)である。桓温の蜀平定に従軍した際、蜀の城壁内外の道路の道幅や植樹の数量などをすべて暗記したという。「痴」とされていた者が、実は人並み外れた頭脳の持ち主であったのである。

さらにもう一つ、羅友は人と交わる際に分け隔てをしない。地方長官から接待の誘いを

受けたが、下級官吏の旧友との先約があったために辞退をした。相手の地位や身分によって自分の意向や節操を曲げたりすることがない。と言うよりも、もとより地位や身分というものにまったく価値を認めていないのである。

人間的スケールの大きい「痴」者は、価値観が根本的に俗人と異なり、世俗的な物差しで世の中を見ることがない。それゆえ、しばしば世間体は無頓着であったり社会常識を逸脱したりするために、世間の人々からは痴れ者扱いされるのである。

### (七) 晩成の「痴」

『世説新語』の中で「痴」とされる人間の一つのタイプに大器晩成型があり、その代表的人物が王述である。「賞誉」篇に、

王藍田おうらんでんは人と為り晩成、時人乃ち之を痴と謂う。王丞相其の東海とうかいの子なるを以て、辟して掾と為す。常えんて集聚かつするに、王公發言する毎に、衆人競いて之に賛す。述末坐に於いて曰く、「主は堯舜ぎょうしゆんに非ず、何ぞ事事皆是なるを得ん」と。丞相甚だ相歎賞す。<sup>32)</sup>

とある。冒頭の一文は、当時、晩成型であることそのものが痴れ者と目される要因となっていたらしいことを窺わせる。むろんそれだけではなく、世に「痴」を以て称されるにはそれなりに常人とは異なる一面を持ち合わせている必要があり、王述の場合は、愚かしいまでの真っ直ぐな性癖がそれである。王丞相（王導）の属官となったが、周囲の役人たちがみな王導に諂って何でも賛同するのを蔑み、「殿とて堯舜ではあるまいに、事毎に正しいことがあろうか」と言い放つ。また別の逸話では、王述が極度に「性急」（せっかち）な癩癪持ちでもあったことを伝えている。<sup>33)</sup>

王述が晩成型であったことについては、『晋書』の「王述伝」に、

少くして父の爵を襲い、年三十にして尚お未だ名を知られず、人或いは之を痴と謂う。<sup>34)</sup>

とあり、而立の年になっても世に名を知られなかったことを記している。その背景を語る史料として、上の「賞誉」篇の条で劉注が引く『晋陽秋』に、

#### 高貴な「痴れ者」たち

怡然として自ら足り、非類と交わらず。群英紛紛として、俊父交も馳せりと雖も、述独り蔑然として、曾て慕羨せず。是に由りて名誉久しく蘊る。<sup>35)</sup>

とある。心静かに自ら安んじ、「非類」（志を同じくしない者）とは交わろうとせず、出世や栄達には関心を示さず、むしろそうした世俗的な価値観を蔑視していた。それゆえ、彼の名声は人知れず久しく埋もれたままであったという。世俗的にうまく立ち回ることを取ってしないためにいつまでも世に頭角を現さないでいる晩熟の者を世の人々は「痴」と呼んだのである。

『太平御覧』巻二四九では、王述に関する類似した逸話を『語林』から引いて、次のようにいう。

王藍田少くして痴の称有り、王丞相地を以て之を辟す。既に見え、他に問う所無くして、問う、「来る時米は幾らの価か」と。藍田答えず、直だ目を張り王公を視る。王公云う、「王掾は痴ならず、何を以て痴と云う」と。<sup>36)</sup>

「痴」と思われていた人間が実は「痴」ではないとわかり、その者の真価が明かされる時、それまで久しく痴れ者扱いされていたからこそ、包み隠されてきた才能や人徳の偉大さが増幅された形で呈示されるのである。

#### 四 魏晋の時代思潮と「痴」

『世説新語』などからの例証によって明らかなように、古くは生理的な意味でのみ用いられていた「痴」字が、魏晋に至って、さまざまな文化的含意を以て当時の名士たちの人となりや振る舞いを語る言葉となったのである。その使用頻度の増加もさることながら、「痴」は従来になく多様な場面においてそれぞれ微妙に異なる意味合いを以て用いられるようになった。

「品藻」篇に、

王中郎嘗て劉長沙に問いて曰く、「我は荀子に何如」と。劉答えて曰く、「卿の才は乃ち当に荀子に勝らざるべし。然れども名を会むる処多し」と。王笑いて曰く、「痴」と。<sup>37)</sup>

という短い逸話がある。自分の人物評を荀子（王脩）と比べてどうかと尋ねた王中郎（王坦之）が、劉長沙（劉爽）の茶化した返答に対して笑いながら、「何をたわけたことを！」と言ったというものである。

ここでは、「痴」という一語を以て相手の意見を軽く打ち消している。極めて特殊な語彙であった「痴」という言葉が、この時代にはごく普通に会話の中で慣用的に用いられるようになったことを窺わせる。

さて、前章では、『世説新語』に見える「痴」を便宜上七つのタイプに分けて示したが、これらを一括すれば、愚かな「痴」と愚かでない「痴」の二者に分けることができよう。前者は、原義のまま、あるいは原義に近いものであり、後者は、原義を超えた精神文化的な意味の広がりを持ち、しばしば肯定的な含意を以て語られるものである。魏晋の時代思潮や文人精神との関わりにおいて特に興味深いのは、言うまでもなく後者の方である。

『世説新語』に登場する「痴」者の多くは、たとえうわべは愚かに見えたり人々から痴れ者と呼ばれたりしていても、実のところは決して愚昧・愚劣ではなく、むしろ頭脳明晰、博覧強記であったり、人徳的に頗る優れていたりする。愚かでないタイプの「痴」者にほぼ共通するのは、彼らが世俗と対峙した位置、あるいは世間から遠ざかった位置に置かれていることである。彼らは社会の常識やしきたりに拘ることがない、あるいはそうした世俗的な念頭がもともとまったく眼中にないのである。「痴」は、いわば諸々の世俗的価値との対立を象徴的に示す一種の典型的人間像であり、礼教的な規範よりも人間的な逸趣を重んじる当時の思潮を反映する概念であった。

清談や人物評が盛行していたこの時代に在って、貴族社会のサロンでは機転の利いた談論やウィットに富んだ言辞が尊ばれた。颯爽として弁舌に巧みであってこそ周囲の高官や文人たちに注目され、名士として認められた。そして、サロンである以上は、そこに集うインテリたちと交際することが仲間入りの条件であった。どれだけ学問に優れていても、周囲の人々との交際を絶って独り書物の世界に没入しているような者は、痴れ者のレッテルを貼られ、疎外されたり嘲笑の的となったりしたのである。『世説新語』の中で、寡黙・訥弁で非社交的な人間が「痴」と呼ばれているのはそのためである。

魏晋を代表する「狂」の人阮籍は、同時に「痴」の人でもあった。『晋書』「阮籍伝」に、

或いは戸を閉じて書を視、月を累ねて出でず。或いは山水に登臨し、日を経て帰るを忘る。群籍を博覧し、尤も莊老を好む。酒を嗜み能く嘯し、善く琴を弾ず。其の意を得るに当たりては、忽として形骸を忘る。時人多く之を痴と謂う。<sup>38)</sup>

とあるが、何ヵ月も門を閉ざして独り読書に耽ったり、山水を遊覧して何日も帰らなかったりというように、世俗との没交渉が「痴」と呼ばれる一因となっている。

また、『世説新語』の中では、晩熟の人間、大器晩成型の人間も「痴」の称を得ている。魏晋のサロンにおいては、年若い然るべき時期に然るべき才能を世に示さないと痴れ者呼ばわりされた。世俗的なことに無関心・無頓着であるがゆえに、「痴」者の多くは必然的に晩成型になるのである。

「痴」の字面は甚だ醜悪なものであるが、この時代において、「痴」と呼ばれることは、実は、必ずしも不名誉なことではなかった。しばしば「人は之を痴と謂う」という類のフレーズが用いられるが、ここでいう「人」とは俗人である。世俗の人間から誹謗中傷されることは、反俗的な文人にとってはむしろ望むところでもあり得るのである。

総じて、「痴」は「俗」と対峙する概念として当時の文人たちが好んで用い始めた言葉である。「痴」は、俗気のない一種の「雅」の表現であり、また「雅」にありがちなベダンチックな気取りや臭みなどをすべて抜き去った素朴で無垢な「雅」の心態を表すものであった。それゆえに、「痴」に対しては、その否定的な字面にもかかわらず肯定的な含意が賦与され、時には文人の本来あるべき理想像として畏敬や羨望の意を以て語られたのである。

晩熟の「痴」者は、早熟で小利口な知恵者たちが持ち合わせていない才能や人徳を内に秘めた大器晩成の人物として一目置かれる存在であった。「簡傲」篇に、次のような逸話がある。

謝中郎しゃちゅうろうは是れ王藍田わうらんてんの女婿なり。嘗て白綸巾はくかみきんを着け、肩輿けんよにして徑ただちに揚州の聴事に至り、王を見て、直ちに言いて曰く、「人は君侯を痴ちなりと言う。君侯まこと信まことに自ずから痴なり」と。藍田曰く、「此の論無ぼんれいきに非ず、但ただ晩令ばんれいなるのみ」と。<sup>39)</sup>

王述は女婿の謝中郎（謝万）に面と向かって「痴」と呼ばれたが、この傲慢無礼を咎めることもなく、「そういう評判がないわけでもない。ただ晩熟なだけだ」と受け答えている。王述は「痴」であることを自ら任じているのである。彼のセリフには自虐的、自嘲的な響きはなく、一種の誇りのようなものさえ感じさせる。

魏晋は、諸々の既成の価値観に対して懐疑の目が向けられた時代であった。伝統的に良いとされてきたものが否定され、逆にそうでないものが肯定されるという価値観の顛倒が起きやすい風潮にあった。「痴」が肯定的な含意を以て用いられるようになった背景には、



「痴」の反義語である「慧」の字が基本的には肯定的な意味を表すものでありながら時として否定的含意を以て用いられたことが、その要因の一つとしてある。「慧」は聡明・利発の意であるが、「黠」（悪賢い）に似たマイナスの語気を伴うことも多い。「痴」はまさにそうした小賢しさや小利口さのない心態をいうものであり、遅鈍であることは、小賢しい利発さが無い分だけ、むしろ純真で篤実な心態としてプラスに解釈されたのである。

## おわりに

「痴」はしばしば「狂」と併せて論じられる。「狂」が動的で外向きの発散性を示すのに対して、「痴」は静的で内向きの凝固性を示すというように、両者は運動性・方向性において顕著な対照的性格を持つ。「狂」者が世俗に対して反抗的で激しい姿勢をとるのに比べて、「痴」者は世俗に対して無関心・無頓着で、栄達や功名など世俗的価値に対する反応が頗る鈍い、あるいはまったく興味を示さない。

元来マイナス的価値の概念をプラスに転化させて精神文化の中に取り込むことは、儒家においても道家においても、古くから多くの例を見ることができる。「狂」については、春秋時代からすでに孔子が進取の気として「狂狷」に対して積極的な価値を認め、また古代人の伝統的処世術として「佯狂」が明哲保身の強い生き方として是認されてきた。一方、「痴」は久しく原義のまま知性的に劣ったり病的に障害があったりする意に用いられ、魏晋の時代になってようやく精神文化的範疇の含意を備えるようになり、当時の人物評において、多くの場合、肯定的な含意を以て用いられる言葉となった。

魏晋以降、「狂」と「痴」は、対時的かつ補完的な関係の概念であるがゆえに、さまざまな思想・文学の著作の上で、並べたり比べたりして登場するようになる。『南史』『沈昭略伝』に、

嘗て酔い、晩日杖を負い家賓子弟を携え<sup>ろうこえん</sup> 娑湖苑に至る。<sup>おうけいぶん</sup> 王景文の子<sup>やく</sup>約に逢い、目を張り之を視て曰く、「汝は是れ王約なるか、何ぞ乃ち肥えて痴たり」と。約曰く、「汝は<sup>しんしょうりやく</sup> 沈昭略なるか、何ぞ乃ち瘦せて狂たり」と。昭略<sup>なた</sup>掌を撫いて大いに笑いて曰く、「瘦は已に肥に勝れば、狂は已に痴に勝れり。王約を<sup>いかん</sup>奈何せん、汝が痴を奈何せん」と。<sup>40)</sup>

とある一節は、両者がすでに同じ土俵に立っていたことを端的に物語る。

「狂」と「痴」は、しばしば「狂痴」、「痴狂」という熟語として用いられ、また詩詞の上では、対偶の関係で用いられるようになる。

なお、「痴」は後世、とりわけ宋詞や明清の戯曲・小説において、派生義である「耽溺」の意が「情」と結びついて、専ら男女の間の凝り固まった情愛を表す「情痴」がクローズアップされるようになる。「痴」は、通俗文学のテーマとして重要な位置を占めるようになり、『聊齋志異』や『紅樓夢』などでは、愚かしいほど純真で偽りのない人間像を表すものとして、「痴人」が新しい人物形象の一典型となるのである。

### 註

- 1) 拙稿「魏晋の文人における「狂」について——『世説新語』を中心として——」（『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第38号、2007年3月、157-177頁）。
- 2) 「狂」については、拙稿「狂狷の系譜——中国古代思想における「狂」の諸相（一）」（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第37号、2006年3月、111-127頁）、「佯狂の系譜——中国古代思想における「狂」の諸相（二）」（同第38号、2007年3月、71-90頁）参照。
- 3) 原文：「癡者神思不足，故亦病也。」
- 4) 原文：「心部曰，慧者獯也。犬部曰，獯者急也。癡者遲鈍之意，故與慧正相反。此非疾病也，而亦疾病之類也。」
- 5) 原文：「癡爲心疾，不可療而瘳。」
- 6) 清・王鳴盛『蛾術編』に「今俗作痴，不知起於何人」とあるように、いつ頃から「痴」を俗字として用いるようになったかは未詳。日本の常用漢字は俗字の「痴」に基づいている。本稿では、便宜上、本文の和文および書き下し文においては「痴」を用い、原文の引用では「癡」を用いることとする。
- 7) 原文：「癡，方言借稱顛狂病。」
- 8) 原文：「迷惑之心，名之爲癡。若於一切事理之法，無所明了，顛倒妄取，起諸邪行。是名癡毒。」
- 9) 原文：「周子有兄而無慧，不能辨菽麥，故不可立。」
- 10) 原文：「不慧，蓋世所謂白癡。」
- 11) 原文：「嬰兒癡聾狂悖之人，嘗有入此者乎。」
- 12) 原文：「任臣者危亡之道也。尚賢者癡惑之原也。法天者治天地之道也。」
- 13) 原文：「人固不同，惠種生聖，癡種生狂。」
- 14) 原文：「夫人之所受於天者，耳目之於聲色也，口鼻之於芳臭也，肌膚之於寒燠，其情一也。或通於神明，或不免於癡狂者，何也。其所爲制者異也。」
- 15) 原文：「有癡狂之疾，歌啼於路，不曉東西，不睹燥濕，不覺疾病，不知飢飽，性已毀傷，不可如何。」
- 16) これについては、つとに白川静『説文新義』の中で、「先秦の古書に殆ど用例がない」と指摘されている。
- 17) 周汝昌・周倫蒼『紅樓夢与中華文化』（北京・工人出版社、1989年）117頁に、「癡，本來是一個生理問題，無甚深義可言。大約從魏晉南北朝這段時期起，它漸漸“轉化”成爲一個“文化問題”。

它原來是一個罵人的難聽的惡詞，後來卻成了一個贊人甚至自贊的美詞」とある。

- 18) 原文：「漢武帝乳母嘗於外犯事。帝欲申憲，乳母求救東方朔。朔曰，此非唇舌所爭，爾必望濟者，將去時，但當屢顧帝，慎勿言。此或可萬一冀耳。乳母既至，朔亦侍側，因謂曰，汝癡耳。帝豈復憶汝乳哺時恩邪。帝雖才雄心忍，亦深有情戀，乃悽然愍之，即敕免罪。」
- 19) 原文：「謝虎子嘗上屋熏鼠。胡兒既無由知父爲此事，聞人道癡人有作此者，戲笑之。時道此非復一過。太傅既了己之不知，因其言次，語胡兒曰，世人以此謗中郎，亦言我共作此。胡兒懊熱，一月日閉齋不出。太傅虛託引己之過，以相開悟，可謂德教。」
- 20) 原文：「王文度爲桓公長史時，桓爲兒求王女，王許咨藍田。既還，藍田愛念文度，雖長大猶抱著膝上。文度因言，桓求己女婚。藍田大怒，排文度下膝曰，惡見文度已復癡，畏桓溫面。兵，那可嫁女與之。」但し、沈宝視本には「惡見文度已復癡，畏桓溫面」の十一字が無い。
- 21) 原文：「愷之博學有才氣，爲人遲鈍而自矜尚，爲時所笑。」
- 22) 原文：「桓溫云，顧長康體中，癡點各半。合而論之，正平平耳。世云，有三絕，畫絕，文絕，癡絕。」
- 23) 原文：「桓玄嘗以一柳葉給之曰，此蟬所翳葉也，取以自蔽，人不見己。愷之喜，引葉自蔽，玄就溺焉。愷之信其不見己也，甚以珍之。」
- 24) 原文：「童少時，神明可愛，時人謂育長影亦好。自過江，便失志。王丞相請先度時賢共至石頭迎之，猶作疇日相待，一見便覺有異。坐席竟，下飲，便問人云，此爲茶，爲茗。覺有異色，乃自申明云，向問飲爲熱，爲冷耳。嘗行從棺邸下度，流涕悲哀。王丞相聞之曰，此是有情癡。」
- 25) 原文：「王汝南既除所生服，遂停墓所。兄子濟每來拜墓，略不過叔，叔亦不候。濟脫時過，止寒溫而已。後聊試問近事，答對甚有音辭，出濟意外。濟極惋愕，仍與語，轉造精微。濟先略無子姪之敬，既聞其言，不覺懷然，心形俱肅。遂留共語，彌日累夜。濟雖雋爽，自視缺然。乃喟然歎曰，家有名士，三十年而不知。……既還，渾問濟，何以暫行累日。濟曰，始得一叔。……武帝每見濟，輒以湛謂之曰，卿家癡叔死未。濟常無以答。既而得叔，後武帝又問如前。濟曰，臣叔不癡。稱其實美。帝曰，誰比。濟曰，山濤以下，魏舒以上。於是顯名。年二十八，始宦。」
- 26) 『晋書』「王湛傳」に、「濟嘗詣湛，見牀頭有周易，問曰，叔父何用此爲。湛曰，體中不佳時，脫復看耳。濟請言之，湛因剖析，玄理微妙，有奇趣，皆濟所未聞也」とあり，王濟がはじめて王湛の学才に気づいたのは『周易』に関する談論によるものであったことを記している。
- 27) 原文：「隱德，人莫之知。雖兄弟宗族亦以爲癡，唯父視異焉。」
- 28) 『晋書』「王湛傳」に、「少有識度，身長七尺八寸，龍額大鼻，少言語。初有隱德，人莫能知，兄弟宗族皆以爲癡，其父視獨異焉。遭父喪，居於墓次，服闋，閤門守靜，不交當世，冲素簡淡，器量隳然，有公輔之望」とある。
- 29) 原文：「王汝南少無婚，自求郝普女。司空以其癡，會無婚處，任其意，便許之。既婚，果有令姿淑德。生東海，遂爲王氏母儀。或問汝南何以知之。曰，嘗見井上取水，舉動容止不失常，未嘗忤觀。以此知之。」
- 30) 劉注の引く『汝南別傳』にも、「襄城郝仲將，門至孤陋，非其所偶也。君嘗見其女，便求聘焉。果高朗英邁，母儀冠族。其通識餘裕，皆此類」とあり，その眼識の高さを讃えている。
- 31) 原文：「襄陽羅友有大韻，少時多謂之癡。嘗伺人祠，欲乞食，往太蚤，門未開。主人迎神出見，問以非時，何得在此。答曰，聞卿祠，欲乞一頓食耳。遂隱門側，至曉，得食便退，了無忤容。爲人有記功。從桓宣武平蜀，按行蜀城關觀宇，內外道陌廣狹，植種果竹多少，皆默記之。後宣武漂

高貴な「痴れ者」たち

洲與簡文集，友亦預焉。共道蜀中事，亦有所遺忘，友皆名列，曾無錯漏。宣武驗以蜀城關簿，皆如其言。坐者歎服。謝公云，羅友詎減魏陽元。後爲廣州刺史，當之鎮，刺史桓豁語令莫來宿。答曰，民已有前期。主人貧，或有酒饌之費。見與甚有舊。請別日奉命。征西密遣人察之。至日，乃往荊州門下書佐家，處之怡然，不異勝達。」

- 32) 原文：「王藍田爲人晚成，時人乃謂之癡。王丞相以其東海子，辟爲掾。常集聚，王公每發言，衆人競贊之。述於末坐曰，主非堯舜，何得事事皆是。丞相甚相歎賞。」
- 33) 「忿狷」篇に，「王藍田性急。嘗食雞子，以筋刺之，不得，便大怒，舉以擲地。雞子於地圓轉未止，仍下地以屐齒蹶之，又不得，曠甚，復於地取內口中，嚙破即吐之」とある。
- 34) 原文：「少襲父爵，年三十尚未知名，人或謂之癡。」
- 35) 原文：「怡然自足，不交非類。雖羣英紛紛，俊乂交馳，述獨蔑然，曾不慕羨。由是名譽久蘊。」
- 36) 原文：「王藍田少有癡稱，王丞相以地辟之。既見，無所他問，問，來時米幾價。藍田不答，直張目視王公。王公云，王掾不癡，何以云癡。」
- 37) 原文：「王中郎嘗問劉長沙曰，我何如荀子。劉答曰，卿才乃當不勝荀子，然會名處多。王笑曰，癡。」
- 38) 原文：「或閉戶視書，累月不出。或登臨山水，經日忘歸。博覽羣籍，尤好莊老。嗜酒能嘯，善彈琴。當其得意，忽忘形骸。時人多謂之癡。」
- 39) 原文：「謝中郎是王藍田女婿。嘗着白綸巾，肩輿徑至揚州聽事，見王，直言曰，人言君侯癡。君侯信自癡。藍田曰，非無此論，但晚令耳。」
- 40) 原文：「嘗醉，晚日負杖攜家賓子弟至婁湖苑。逢王景文子約，張目視之曰，汝是王約耶，何乃肥而癡。約曰，汝沈昭略邪，何乃瘦而狂。昭略撫掌大笑曰，瘦已勝肥，狂已勝癡。奈何王約，奈汝癡何。」